東放学園
OB
座談会

業界に飛び立ってから30年
エンタメへの情熱は変わらない。

2009年4月、30周年を迎える東放学園。
この節目を記念して、エンタメ業界を先導し、活躍しているOBたちが一堂に会した。
恩師・佐久間名誉校長を囲んで、あの日、あのときの懐かしいエピソードや業界の“今”を大いに語り合った。

佐久間 義彦

(株)TBS映画社～(株)千葉ビデオを経て、昭和47年に東放学園入社。本学園設立より長きに渡り、エンターテインメント業界の人材育成にたずさわる。現在、東放学園専門学校、東放学園音響専門学校名誉校長。

佐久間“先生”というより兄貴分。授業を超えて、人間を教わった。

佐久間：僕は卒業生のことをいつも「さん」づけで呼んでいるんですよ。たいへん競争の厳しい放送業界の中で、よく生き残られたなという感慨とともに、やはり学校につかず離れず、いろんな意味でちゃんと来ていた人が、こうして成功なさっているんだなと感じます。その人たちがこうして集まってくれてとてもうれしいですね。東放学園は30年を迎えるということですが、僕はあの当時のことを昨日のことのように覚えている。みんな全然変わらないよ。パッと見たとき「あ、誰々」というのはすぐにわかる…ただ、年のせいで「え～っと…」って、思い出せないことはあるけど(笑)。

清水：僕は『芸術鑑賞』の授業が佐久間先生だったんですが、いやあ、もう怖い先生というイメージが(笑)。今でもいいお声ですけど、教室中に声が朗々と響いて。遅れていくと怒られるし、毎週緊張して授業受けてました。

佐久間：マイク1本で250人教えるときはね、こっちも緊張するのよ。で、こっちが緊張すると緊張のハードルが倍になるじゃない？　それで怒ってるように見えるんだけど…ホントは怒ってたかも(笑)。『芸術鑑賞』という授業では、日本の伝統文化を理解せずに西洋のものを学んでもしょうがないから、歌舞伎や能などの鑑賞から入っていった。あるOBが、業界に入ってからようやく授業の意味がわかったといってくれてね。「そうだろ！」っていい返してやりました(笑)。みんな学校に対して、それぞれ思いを持っているでしょう？　とくに荒井光明さんは僕を恨んでいると思う。

荒井光明：そんなことないですよ(笑)。たいへん感謝しています。同級生の堤(堤幸彦監督：78年度卒)らとやっていた“情報文化研究会”というサークルでは、立ち上げから卒業まで2年間、ずっと面倒みていただいて。先生は生徒として僕らに接していたんでしょうけど、僕らからすれば兄貴分。プライベートを含めていろんな相談ができたんです。よく授業が終わった後、先生を西新宿に連れ出して、お話を聞かせてもらいましたよね。

小河原：僕がテレビのタイトルデザインの仕事に就いたのは、実は佐久間先生のおかげなんです。『制作実習』でたまたま僕が描いたタイトル文字を見て「お前、うまいじゃないか。じゃあTBS行ってみるか」っていわれて。TBSのデザイン部を紹介されて、ずっと1年くらい通っていたんですが、2年生のときに『刑事コジャック』(TBS系)のタイトルデザインを、現場のプロと一緒にやらせてもらった結果、プロじゃなく僕の案が採用されたんです。オンエアは学校の近くの喫茶店で佐久間先生や仲間たちと一緒に観ましたね。タイトルが出た瞬間は、そこにいた仲間やお客さんみんなが拍手してくれて。これは感動ですよ。
佐久間：映画のワンシーンみたいだったね。「こいつがやったんだよ！」っていったら「ワー！」って。

不自由さを逆手にとって クリエイティブな力を身につけた。

角國：僕は、何もわからずに田舎から出てきたもので、とにかく“放送関係に進みたい”と思って、東放学園に決めたんです。当時は、学校の1階に山水電気のショールームがあったから、JBLのスピーカーを聴きながらドリンクを飲んだりして…懐かしいですね。あと近所にパチンコ屋があって。
佐久間：「アラジン」。学生のおこづかいはみんなあそこに吸い込まれていった(笑)。
角國：業界との最初の関わりということでは、先生にカメラアシスタントのバイトをすすめられて、「角國ちょっと来い、日活行け」とかいわれて、ドラマの撮影現場でバイトしていました。
荒井光明：僕も1年生の夏休みくらいからずっと現場に出たいと思っていたんです。先生の親心からか、僕ら情報文化研究会のグループにバイトを紹介いただいて、正月特番に何本か関わることができました。荒井吉春さんとも、18歳くらいのころにすでに仕事をご一緒しているんですよ。荒井さんはそのとき生田スタジオでブーム(マイク)を振られてて、僕は何もわからないAD。『浮浪雲』というドラマでした。
荒井吉春：そうだ！思い出した。でも、もしかしたら、俺、「荒井！ 荒井！」っていってたかもしれないね。
荒井光明：いわれてましたね(笑)。現場には他にもたくさん先輩がいらっしゃって。
荒井吉春：荒井さんはADでもすごい好青年。こんなスッキリしたADさんがいるのかというくらいしゃきっとしてた。しかし、今日来ている方々は、やっぱり学生時代から目立ってましたよね。その人たちが現役で頑張ってるのはすごいことだと思います。そうだ、今思い出しましたが、学校の思い出ということでは、当時は機材が乏しかったかな(笑)。
佐久間：申し訳ない(笑)。あのときの実習機材は、大阪万博から譲り受けたものをスタジオに無理やりハメこんでいたから。だからよくいえば、“家貧しくして、子育つ”っていうやつかもしれないね。ワイプなんかもボール紙を切って作ったりして、生徒一人ひとりが工夫をしてた。「プロになったらいろんなことができる。その前に何かやることあるだろう？」っていうと、みんな考える。でも、今の東放学園の機材はすごいよ。
荒井吉春：そうですね。僕自身、講師をやらせてもらっていますが、生徒がうらやましい限り（笑）。我々は3期の卒業でしたから、まだ歴史も浅かった。でも、乏しい機械の中で学んだことで、自分で“作り上げる”能力を身につけたし、逆に技術に強い人間が増えた時代ですね。今は機械が発達しすぎて、それを使いこなせる人間が業界にも減ってきたかもしれません。
角國：カメラも照明もそうでしょうけど、最近の音響機材はほとんど人間が手を加えなくても、ある程度音は入れてくれるようになりましたからね。昔はリミッターやコンプといった音響機器も1台しかなかったから、どこで使うかを一生懸命考えてました。

ベストテン番組の全盛期に 屋台骨を支えた若きOBたち。

荒井吉春：僕はドラマの音声で得た経験を『ズームイン!! 朝！』などの中継番組で活かしたんですよ。例えば海の近くからの中継では、音声ケーブルを浜辺まで伸ばしてもらって、画に合った音を作ってほしいと現地の音声さんに要望したりして、朝の番組で「視聴者を振り向かせる音」を目指しました。あと、アコースティックギターの音を拾うために、ピンマイクをサウンドホールの中に入れるという方法、実は最初に考えたの僕なんですよ。
一同：へえー！
角國：その方法は、今でも各局でやっていますね。当時は歌番組が全盛時代。『ザ・トップテン』『ザ・ベストテン』といった番組では、出演者の顔ぶれがいつも一緒だったから、次の局の打ち合わせを前の局でやったりして(笑)。
荒井光明：歌番組といえば僕は誰よりも音楽が苦手なんです。それなのに、業界に入るとすぐにバラエティ以外に歌番組などのADもどんどんやらされた。何も知らないものだから、ディレクターに「四小節のタイミングで…」っていわれても、「What's 四小節？」ですよ(笑)。譜面台も発注しないでいたら、伴奏のバンドさんに怒られてやっと「ああ。譜面台って必要なんだ」と(笑)。そんな風にわからないまま突っ走ってました。
荒井吉春：僕だって最初は何もわかってなかったですから。スタジオのスリッパに「MA」って書いてあるの見て「“マ”ってなんだよ」(笑)。
荒井光明：みんな失敗して覚えていくんですよ。でも、そういう恥ずかしい思いをして覚えていったおかげで、今は強いよっていう。譜割が読めるドラマのディレクターなんて、今あまりいないと思いますよ(笑)。
佐久間：ところで、清水さんはテレビより音楽の方がメインだけど、コンサートの照明デザイナーとして、何か企業秘密はないの？
清水：企業秘密…ですか？（笑）
佐久間：つまり、これが清水だぞみたいなもの。
清水：それはもちろん僕独自の味付けはあると思います。それは僕が意識してるんじゃなくて、「やっぱり清水さんの明かりだ」というのが周りの人にはあるみたいですね。僕はみんなによく「変態気味」とかいわれるんですが(笑)、ラベンダー系が好きなんですよ。それが基本になっていて、どこかしらそれが入っている。料理でいえば隠し味みたいなものですね。

勉強する気持ちのある人は とことんバックアップしたい。

小河原：僕はデザインを31年間やってきて、昨年突然、制作技術部長になったわけですが、何もわからないまま半年が過ぎ、制作技術部の人事面談などは悪戦苦闘

東放学園OBを抜きにして、業界は成り立たない。僕らだけで1本映画が撮れるよ(笑)。

小河原 義一（75年度卒）

（株）プロカム 執行役員 技術本部制作技術部長。東放学園在学中より、テレビ番組のタイトルデザインに関わる。主な作品に『刑事コジャック』『ふぞろいの林檎たち』『ザ・ベストテン』など。グラフィック分野では、1986ニューヨークADCに入選している。

OGAWARA'S WORKS

DVD
『ふぞろいの林檎たち Vol.1』
発売元：TBS 販売元：アミューズソフトエンタテインメント ASBY-2104
1983年の初回放送以来、同世代の若者たちの圧倒的な支持を集めて、高視聴率をマークしたテレビドラマの金字塔。この作品のタイトルデザインを小河原さんに発注したのは、AD時代の荒井光明さんだったそう。

SHIMIZU'S WORKS

『a K2C ENTERTAINMENT DVD-BOX 米盛Ⅲ』
発売・販売元：ソニー・ミュージックレコーズ SRBL-1341
清水さんは、米米CLUBの再結成ライブでもライティングデザインを担当している。活動再開後の3つの「マツリ」を収録した3枚組ライブDVDで、清水さんの明かりへのこだわりをチェックしてみよう！

清水 淳（80年度卒）

ライティング ビッグワン（株） 取締役。コンサートなどのステージで、照明プランを提案・構築するライティングデザイナーとして活躍。担当した主なコンサートツアーに、THE BOOM、吉川晃司、米米CLUB、Andy Iauなどがある。

していますよ。これからの若い人たちに望むのは、もっと勉強してほしいということ。クリエイターというとデザインの印象が強いかもしれませんが、音も映像もみんなクリエイターなんです。そして、クリエイターというのはやっぱり勉強しなければいけない。だから面接に来た人には「あなた方が勉強して伸びることで評価されて、そしていいお給料もらって、いい生活ができるんです」ときちんと説明しています。

清水：やはり常に勉強していく姿勢は持ってほしいですね。僕ら照明は電気のことをわかってないとダメだから、電気に関する免許を取りたいという意志があれば、そのための時間もなるべく与えるし、受験料まで面倒みたいと思っているんです。僕も会社に入ってから電気工事士の資格は取りましたし、必要だと思うことは、どんどん勉強してほしいなぁ。

小河原：僕自身、常に勉強でした。20年やってようやく一人前の兆しが見えて、25年経ってだいぶいいかなという感じになって、30年でようやくほっとしています。もちろん、勉強してても伸びない人はいるけど、僕はそういう人は助けてあげたいんです。ウサギとカメでいえばカメの人。僕自身カメでしたからね(笑)。

荒井 光明（78年度卒）

（株）ドリマックス・テレビジョン　取締役／エグゼクティブ プロデューサー。アシスタントプロデューサーとして『ふぞろいの林檎たち』に携わったほか、ディレクターとして『渡る世間は鬼ばかり』などの名作を演出。また、プロデューサーとしても活躍し、『義父のいる風景』では 平成12年度文化庁芸術祭テレビドラマ部門　優秀賞を受賞。

ARAI'S WORKS

『橋田壽賀子ドラマ　渡る世間は鬼ばかり』パート1 DVD-BOX 4枚組
発売元：TBS　販売元：ビクターエンタテインメント STDS-5021 1万4700円（税込）
国民的人気ドラマ『渡鬼』に、荒井さんは第8シーズンからディレクターとして参加。先輩ディレクターたちが作り上げた演出スタイルを受け継ぎながら、高齢者層にも親しみやすいドラマ作りを目指している。

“なんとなく”業界にあこがれている大学生よりも、専門学校生の「これをやりたい！」という意志を尊重したい。

佐久間：小河原さんは、篠原榮太というタイトルデザインの大巨匠がいて、そこにぶつかっていってはハネ返されて学んできたもんね。篠原さんはいわゆるアーティストで、勉強するとまた向こうに行っちゃうほどの巨星だから。

小河原：篠原先生には、勉強しないと追いつけないんですよ。一生追いつけないと思いますが…。ただし、なまけていたら終わりです。

日本でも、韓国でも放送業界で活躍したいなら、TOHOがいい。

荒井吉春：MAを目指している人にお願いは、ただ音だけやるんじゃなく、そのときにスーパーの確認もしてあげるようなMAになってほしいということ。MAは、最終チェックなんです。演出の人は何回も見てるけど、誤字脱字に気がつかないときがある。そのときにMAは意外に冷静に見られる。技術はもちろんですが、そういう言葉の勉強とか情報的なものは常に勉強してほしいですね。音だけでなく映像にも参加する気持ちで仕事をしてほしいんです。うちの会社の面接には大卒の方も来ますが、大卒と専門学校の学生の大きな違いがあるんですよ。それは大学生は4年間行ったわりには「〇〇をやりたい」という明確な目標があまりないこと。ただ「やってみたいな」っていう程度なんですね。それよりも専門学校へ行って「テレビの仕事をやってみたい」という気持ちのある人をうちとしては採用したい。我々の時代は、「君たちはテレビ局で仕事ができない」って先生にいわれたぐらいで…。

荒井光明：確かに当時は放送局員がすべて制作・技術をやっていましたから、四大卒じゃないとまずテレビ業界には入れないと。でも15年後、それを覆して、我々がすべてやっているという状況です。今、東放学園の卒業生なくしたら日本の放送業界大変なんじゃ、って思うぐらい。

佐久間：それは絶対そうだよ。相当な数の東放学園卒業生が業界にはいるからね。

小河原：毎年、韓国に出向いて韓国の卒業生と同窓会をやっていて、同時に日本の専門学校や大学が、学生獲得のために韓国内で学校説明会を行っているところへも視察に行っているんですが、東放のブースの人だかりがいちばんスゴイですよ。それは、卒業生がみんな韓国の放送業界で活躍しているからです。韓国でも、日本でも、放送局で活躍するにはどこがいいかというのはイコール「TOHO」なんです。だから、どれだけ卒業生が頑張っているかということですね。東放学園の力はすごいですよ。

荒井吉春：先輩が本当にいっぱいいますから、卒業してからも非常に安心です。本当に「これをやりたい！」という気持ちを持って入学すれば、多分やりたいことは達成できると思いますよ。

佐久間：好きだっていう動機が大事だからね。

荒井吉春：単純な動機でもいいんですよ。芸能人に会いたいっていうのでもいい。僕は歌手のあべ静江が大好きで、彼女にマイクを渡したときは手が震えましたから(笑)。

小河原：動機は不純でもいいよね(笑)。

佐久間：っていうか、すごく清純じゃない？(笑)。だってみんなドキドキすることがあるから、そこに近づきたいという目標を持つわけだから。

小河原：TBSのテレビ玄関に入って行くのが、もう感激でしたよね。

角國：僕なんかTBSのバスタオルもらっただけで「うわ～！」って(笑)。業界に入ってから非常にうれしかったのは『箱根駅伝』ですね。放送局員でない、プロダクションの人間が中に入ることは許されなかった時代に、箱根センターのミキサーをやらせてもらったのは感無量でした。あとTBS旧局舎のスタジオで、プロダクションの人間として初めてサブに座ることもできました。今は、そうしたことは普通のようになったけど…。

荒井光明：ドラマのディレクターとして緑山スタジオのサブに座ったときは感激しましたもん。トークバックの声が震えました(笑)。

角國：僕らはどこの局でもいいから、あそこに座るのにあこがれてたんだけど、今の子たちは何も考えずに当然のように座ってるから、「お前、それでいいのかよ！」っていうのはあるけど(笑)。

テレビやコンサートの現場でも女性の活躍が目立っている。

佐久間：みんな30年選手だからね、いいときも悪いときも見てきてる。

荒井光明：どちらかというとAD時代の方が思い出は多いですね。『ふぞろいの林檎たち』では小河原さんとご一緒できたんですが、冒頭でりんごを投げるあのシーン、実は歴代のチーフADがやっているんです。パート4の下手（しもて）でりんご投げてるのは、僕の右手です（一同：爆笑）。

荒井吉春：僕らがいちばんいいときにいたような気がするなあ。

佐久間：ところが荒井さん、俺なんかはもっといいときにいたんだよ(笑)。これが僕の十年先の先輩に聞くと“さらによかった”となる。ただ、時代は変わってもそこに通底しているものはあるじゃない。それが“好きじゃなきゃできない”っていう部分なんだよね。あと、ねばる気持ちがないと絶対ダメ。

荒井光明：そうですね。僕はADのときはすごく優秀だといわれてて、30歳でゴールデンのテレビドラマのディレクターになれましたが、それでも10年かかった。前回のシリーズからディレクターとして参加する

ARAI'S WORKS

『熱中時代』DVD-BOX
発売・販売元：バップ　VPBX-11955
4万530円（税込）
『熱中時代』は、現在『相棒』でおなじみの水谷豊が主演を務め、一世を風靡した人気ドラマだ。荒井さんはこのドラマで『教師編』『刑事編』『教師編・第2シリーズ』と、すべてのシリーズで音声を担当した。

荒井 吉春（75年度卒）

（株）ヌーベルポスプロセンター　代表取締役。ドラマ『前略おふくろ様』『熱中時代』『池中玄太80キロ』、情報生番組『ズームイン!!朝！』などテレビ番組で音声マンとして活躍。また、MAミキサーとしても数多くの番組でポストプロダクション業務に携わっている。

どんな状況でも「面白いじゃないか！」そう考えられるプロのスタッフを待っている。

ことになった『渡る世間は鬼ばかり』では、正直、自分の番が来たかという気持ちでしたね。駆け出しのころは確かに「俺どうなんのかな～」と思ってはいましたけど、本当に辞めようとしたこと一度もないですよ。
荒井吉春：それは素晴らしい。僕、100回以上辞めようと思った（笑）。
荒井光明：いや、辛いなと思うことはたくさんありましたよ。
角國：ゴルフ中継だと大宴会場に布団敷いて寝たりしてね。隣の人の足が邪魔で大変でしたよ（笑）。あれはツライ（笑）。でも、女性のカメラマンもそこで寝てました。当時で女性カメラマンってすごいですよね。
荒井光明：今は、本当に女性多くなりましたね。
清水：コンサート照明の世界では、今ムービングライト（コンピュータで動く照明）が全盛なんです。どんどん機材が重くなっていて、体力勝負みたいなところがあるけど、女性のほうが志望者が多いですよ。そういうハンディはもちろん乗り越えてもらう必要はあるんですが、女性の繊細なデザインの感性も必要だとは思いますね。

非放送メディアも視野にいれ
新たな人材を育てていく。

荒井吉春：しかし30年経ってみるとやはりこの業界って狭い。昔お世話になった人が社長や取締役になっているし。「えっ！ 社長かぁ～」なんて（笑）。
佐久間：東放学園OBの社長も、小さいプロダクションも含めたらすごい数になるだろうね。
小河原：だったら東放学園で業界を仕切っちゃえばいいじゃないですか（笑）。
佐久間：本当に映画が１本撮れるよ。でもそれだけはやめようね、収拾がつかなくなるから（笑）。
小河原：鹿島（鹿島勤監督：76年度卒・代表作に『静かなるドン THE MOVIE』など）がいっていましたよ。「そのときは絶対オレにやらせろ！」って。
佐久間：もっと大変になっちゃうよ（笑）。
小河原：しかし、まさか自分たちがこんな立場になるとは思わなかったですね。
佐久間：残る奴は残るんだよ。どんなことあったって「面白いじゃないか」って考えられる奴。
荒井吉春：甲子園の優勝校の人たちと一緒ですよ。選ばれた人たちだけが、楽しい時代を過ごせるんです。
佐久間：プロだもんね、みんな。そんなプロのタマゴをどう育てていくかが僕らの仕事だと思ってる。でも、今のテレビは、多チャンネル化などによって本当にターニングポイントに来ているよね。非放送メディアへも活躍の可能性を見いだしながら、みなさんのような社長や役員たちも、本気になってメディアを見直していく時期に来ているんじゃないかな。あ…まるで先生みたいなこといってしまった（笑）。今日は本当にありがとうございました。

角國　寿夫（78年度卒）

（株）タムコ 取締役兼執行役員　業務部担当。卒業と同時に、映像分野のオーディオ・プロダクションであるタムコに入社。音楽番組からバラエティ、Ｊリーグなどのスポーツ中継、『24時間テレビ』のような大型番組にいたるまで、幅広い分野で音声マンとして活躍。

TSUNOKUNI'S WORKS

『24時間テレビ』
『欽ちゃんの仮装大賞』
『アメリカ横断ウルトラクイズ』
『世界陸上』
『ザ・トップテン』